



晴夜

(6) — 2

柴田 佐知子

更に踏む肋も失せしキリストを

春愁や正座をくづしても真昼

白鳥帰る一羽づつ湖を抱き

一杓をしづめて花の寺にあり

暗詰まる墳や祠や山桜

花焚火まはりの花を震はせて

耕すや十方山に塞がれて

むずむずと角ぐむ仔牛桃の花

稜線を出て定まりしいかのぼり

青葉の夜

小林 朱夏

飛翔する鳥より高き雲雀かな

眼を病みて視野は無限に蜃気楼

囀や淋しき扉開けむとす

山桜山また山に枝ひろげ

花守に案内されし花の中

大桜負ふ大仏の前傾す



子供力士を積んでトラック暖かし

蹲踞する子供力士や春まつり

躑躅山津波となりて迫り来る

口答へせずに頬ばる桜餅

春愁を一掃したる汽笛かな

饒舌は朧月夜に嫌はるる

蛤に衣を着せる人形師

鯉幟大きな順に泳ぎだす

子が問へば恋を語らむ青葉の夜

孫のことを俳句にすると、ことごとく捨てられる。何故と尋ねると孫は可愛いと判っているからと言われた。ではどうして孫は文句なく可愛いのだろうか。考えるに小さな動物、例えば雛や子犬は言うに及ばず、象や河馬の子に到ってはもうたまらない。それだけだろうかと又考える。五十才を過ぎて孫が生まれた私は、どう頑張っても五十年後の彼を見ることができない。命は限りがあると漠然と理解していたが、年数で実感した時、私は自分の命がいとおしくなってきた。孫の存在がいとおいしいのは結局は全ての命がそうだからだったのだ。

母にこんなことを話そうものなら、あなたは相変わらず理屈っぽいね、と言われるに違いない。

桃霞

里中章子

薪組合こぞりて暖炉納めけり

石走る水の速さや露の臺
いはばし

淡雪や泥吐き切りし桶の貝

吸ひついて乳房押しみる子猫かな

鳥曇男の詩の瘦せにけり

たよりなき齡に寄せて春の波



「桜狂い」と定評のある私だが、今年は自身も家族も健康を損なって、心重く桜狩もできなかった。吟行も句会もつくづく体力がものを言う。

かつて見たもの、思いやったもの、あるいは毎日見ている風景のわずかな変化を見逃さず作句して新しい世界を作る。なかなか困難かつスリリングなことである。さいわい「空」の先輩たちの句は新

白湯飲んで胸あたたかし桜の夜

風船の一日遊びし大樹かな

墓守の小さくなりし桃霞

墜ちてくるひかり礫の雲雀かな

鯉の口浮かんでは消え藤の花

竹箒だんだん増ゆる大桜

湯上りや春雨樹々にゆきわたる

子に植ゑし桜咲きけり万朶たり

瀬の上の風あをあと麦湯かな

鮮で力強く、大いに刺激になる。自分の生活空間、風土、俳句観が急に変わる訳はないので、私も一歩進むために、先ずは技術的なところを少し変えてみようと思図した。

1、省略すること

2、対象が動いて変化する様を詠むこと

右の二つを特に意識している。

佐知子主宰からは、句にメリハリが出て良くなったと言われている。1、2、とも特別なことではないのだが、人は意図しなければ変わらないのである。

今回は十五句が揃わず、締め切り日までに粘って主宰の選を仰いだ。根性と努力という言葉の嫌いな私も少し粘るようになってきたかとおかしかった。主宰はラッセル車のように力強くみんなを引っ張り、厳しくかつ優しい。

俳句を通して、人との優しいあたたかな関係ができ、自身も心深くものを感じられるようになれば嬉しいことである。

桜湯

苑
実
耶

母覚むる音をかすかに春障子
川の面に色をひろげし桜かな
散る花の真中に押す車椅子
流れきて堰に層なす花の色
薄墨の空満開の花の向かふ
長居して桜湯の出る喫茶店



近づかず離れず阿蘇の蕨狩る

石鹼玉頬をゆつくり萎ませる

思ひ出すやうに矢車回りけり

山よりの風やや強き路を採る

蜘蛛の子の散りたる闇の母郷かな

椎の花祝詞柏手響きけり

樟若葉医院の庭に聖母像

心太海の匂ひをすすりけり

樟若葉の季節が巡ってきた。

十年前のこの時季、私は病院のベッドの上に居た。手術後、半年間の治療入院のあと、治療の成果を診るための再手術。その結果が出るまでの十日間は、退院か再治療かの分かれ道だった。

病院の廊下から一本の樟の木が見えた。

風に光る若葉が眩しかった。その勢いに気圧されそうになりながらも「負けない」と思った。入院を楽しもうと決心した。

そして秋。一年間の病院生活を終えた。

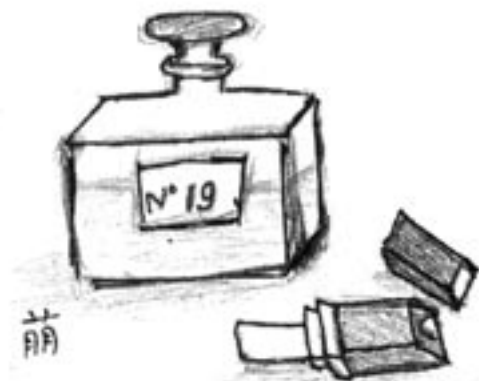
この十年、大勢の病院仲間を見送ったが、何人かとは今も交流が続いている。

樟若葉の季節になると、生かされていることに思いを新たにしている。

春

高倉恵美子

菜の花や土手に北向き南向き
笑ふこと考へてゐる春炬燵
身ほとりに華やぐことも董咲く
春月や生かされて友眠るのみ
初恋の茅花の甘さほどのこと
郵便夫桜に声をかけてゆく



コーヒーに砂糖多めや花の冷え

さくら散る兵たりしこと夫は言はず

鶯や石積み上げし千枚田

筍に前うしろあり鋤入るる

牛の顔伺ひながら蕨摘む

人づてに母の恋聞く花いちご

木蓮のための青空ありにけり

アネモネや昨日のことは今日忘る

楠落葉一にち音を立てにけり

村の一年に書き忘れていたが、毎年四月になると村の入口の道路の端に白い旗が三本立てられる。今年の当番は誰だろうと話しながらこの村に伝わる行事を思う。毎年、順番に三戸の者が英彦山神社と行橋市の須佐神社に参詣することになっている。いつ頃から始まったのかは氏神の記録にもないし、長老に尋ねてもずいつと昔からということしかわからない。英彦山神社への参詣はうちの村だけではなく近隣の村でも行われているようである。しかし、須佐神社へはこの村だけである。なんでも昔、村に疫病が流行し死者も多く出たとき、須佐神社への祈願とお守りによって助かったからだと伝えられている。今では車で行くので一日で終わるが、私の嫁いできた当時は汽車に乗り継いで一泊しなければ二社への参詣はできなかった。

四月の道路愛護の日には参詣した者を祝いの謡三番手拍子で上座に迎える。そして参詣した者からは土産の煎餅が配られる。以前は英彦山がらからも配られていたが、今はない。参詣の旅費は全て村の負担である。



空 集

柴田佐知子選

雪降りつづく教室の掛時計
手毬唄母は幼き日に逝けり
藪柑子の実に雀たち雀たち
路地売りの菠薐草に薄氷
野水仙うしろの正面軍艦島
僧院を包みこみたる冬木立
石間よりにじむがごとき堇かな
辻 兎 夢